

韓国済州島における在来馬およびサラブレッドの 飼養状況調査

河 合 正 人

畜産管理学科家畜生産機能学講座助手

1. 目 的

韓国済州島において飼養されている在来馬およびサラブレッドについて、関連研究機関および生産農家を訪問し、その飼養状況を調査する。また済州農業試験場において「日本における馬飼養の現状」に関するセミナーを開催し、講演を行うとともに現地研究者との情報交換を図る。

2. 期 間

2001 年 12 月 2 日～16 日

3. 場 所

韓国済州島内を主な調査対象とし、済州農業試験場を拠点とする。

4. 内 容

済州（チェジュ）島は朝鮮半島の南約 150 km にある韓国最大の島で、緯度は福岡県とほぼ同じであり、周辺に散在する島々を含めて済州道と呼ばれている。済州島は東西約 73 km、南北約 41 km の楕円形であり、面積は 1,826 km²、海岸線延長は 250 km で、人口は約 54 万人である。島の中央には海拔 1,950 m の火山である漢拏（ハンラ）山があり、島内には 360 もの奇生火山に依ってできた丘が散在し、韓国の他の地方とは違う独特な景観をしている。気候は四季がはっきりしており、夏は海洋性気候、冬は大陸性気候の影響を受け、年間平均気温は約 16℃と比較的温暖な島である。

この済州島には、体高が 120～130 cm 程度と北海道和種馬と同程度、もしくはひとまわり小さな体格をした済州馬が飼養されている。島内にある観光地としても有名な競馬場では済州馬のみのレースが毎週末行われ、サラブレッドのレースは韓国本土で行われる。今回は馬産関連機関や農家を訪問して韓国の馬飼養状況を調査するとともに、現地研究者との情報交換を図ることを目的とした。

韓国からは本学にも数多くの留学生が来ており、そのうちの一人、李洪求氏は畜産管理学科家畜肥育学研究室に在籍して学位を取得し、現在はソウル大学で教鞭をとられている。私が北海道大学

在籍中からの友人でもあり、済州島に渡る前にまず李氏の案内で水原（スウォン）市にあるソウル大学農学部や農村振興廳畜産技術研究所を見学させていただいた。

5日目にソウルから済州島に渡り、6日目からいよいよ本格的な調査を開始した。最初の2日間で済州農業試験場および済州大学校といった研究機関や、韓国馬事会（KRA）育成牧場および済州競馬場、韓国競走馬生産者協会



写真1. 済州競馬場

を訪問し、済州島における馬飼養の現状を把握した。済州島における馬飼養頭数は済州馬 5,233 頭、サラブレッド 2,751 頭であり、韓国馬飼養頭数の 94% がこの島に集中している。まさに済州島は韓国における馬産の中心であり、日本における北海道、日高地方といったところである。

競走馬として登録された済州馬は、すべて済州競馬場内で飼養、調教される。550 頭分の馬房に常時 500 頭以上が収容され、調教師や厩務員、騎手の宿舎も競馬場内にある。済州馬のレースは当然サラブレッドより短い 800m から 1800m の距離でほとんどが 10 頭立て、毎土日の 12:25～17:20（7、8 月は 16:25～21:20）に 1 日 10 レースが一年中開催されている（写真1）。訪問した日は土曜日であったが、韓国人に混じって日本人観光客も目立ち、競馬場内は大変にぎわっていた。ためしに 3 レースほど馬券を買ってみたが、日本でも韓国でも、競馬の予想というのはなかなか当たらないものである。

日本在来馬は差毛や白斑が入らないものとされ、済州馬も本来はそうであろう。しかし、ここで競走馬として飼養されている馬には額の白斑が目立ち、それどころかポニーのような斑毛の馬さえも多い。生産者は当然競走馬として速い馬を目標とし、そのためかなりの割合でサラブレッドなどの外来馬の血が入る。スピードは速くなるが当然体格も大きくなり、結果、差毛や白斑の馬が多くなる。純粋な在来馬か否かを正確に区別しているわけではないが、レースは体高によって 2 つに分けられる。125 cm 以下を在来馬本来の体高とみなして「済州在来馬」のレースとし、これを越えて 133 cm までの馬は単なる「済州馬」のレースに出走する。サラ系ならぬ、在来系といったところであろうか。この日に行われた 10 レースのうち 8 レースが済州馬、済州在来馬はたったの 2 レースで、800 m、1000 m の比較的短いレースであった。これ以上の距離になると、済州在来馬はどう頑張っても済州馬には勝てないそうである。額の白斑や斑毛の馬が目立ったのも頷けるが、在来馬を研究してきた私にとっては少し寂しく、済州在来馬のレースこそ貴重であり、もっと発展して欲しい気がした。

サラブレッドについては血統、繁殖および競走登録をすべて KRA が行っているが、KRA で最も特徴的な業務は「種付け支援」であろう。現在韓国では種雄馬が 31 頭登録され、うち 23 頭は KRA が所持し、KRA の育成牧場で管理されている。残り 8 頭は民間の牧場が所持し、生産農家は繁殖季になると繁殖雌馬を種雄馬農家まで運搬し、いわゆる「種付け料」を払って交配させるのは日本と同様である。一方 KRA が所持する種雄馬との種付けについては、KRA の支援農家に登録されていれば無料である。KRA は繁殖雌馬を所持せず、民間の繁殖農家に無料で種付けを行い、

6ヵ月齢の時点でその育成馬を買い取る。ちなみに昨年 KRA が買い取った6ヵ月齢の馬はAランクが885万ウォン（約88万5千円）、Bランクが835万ウォン（約83万5千円）であり、馬によってそれほど大きな差もなく農家は安定した収入を得る。その後はKRAが育成、調教し、24ヵ月齢でセリを行って馬主に購入されるという流れである。競馬の歴史はダービーの歴史というが、昨年行われた韓国ダービーはようやく第4回を数えたばかりである。サラブレッド生産に関してまだまだ歴史の浅い韓国では、高い種付け料を払って冒険するよりも、種付け無料で6ヵ月齢まで育成し、ある程度の金額をKRAから確実に受け取る方を選択する農家が圧倒的に多い。しかし、無料で提供される種雄馬がほぼ固定され、これに依存する農家ばかりでは競走馬の能力にも差が出てくく、また今後の能力向上も期待できず、韓国競馬の発展につながらない。こうした考えから、種雄馬を海外から購入しようとする農家も出てきてはいるようだが、そこには各農家の経済的事情が大きな問題として関わってくるだろう。

9日目、事前に「日本における馬飼養の現状」に関する講演をしてもらえないかと提案があり、当初は試験場内の研究者に対する簡単なものと気軽に引き受けたセミナーを開催した（写真2）。が、実際は試験場および大学の研究者からKRAの研究者や調教師、済州馬やサラブレッドの生産者まで100名を超える人数が集まり、数多くの質問もあったため予定の2時間を超えて3時間近い有意義なセミナーおよび情報交換を行うことができた。またこのセミナーには韓国本土からの研究者数名にも参加していただき、その一人、趙昌衍博士の御提案で済州島での滞在を数日短縮し、ソウル近郊の天安（チョナン）市にある畜産技術研究所においても後にセミナーを開催することとなった。

その後の2日間で、済州島畜産振興院、済州馬生産農家および観光牧場、サラブレッド生産農家などを見学し、聞き取り調査を行った。済州島畜産振興院では済州馬の登録業務を行っており、院内の牧場においても現在126頭（種雄馬および種雄候補馬11頭、繁殖雌馬70頭、育成馬45頭）の済州馬を飼養している（写真3）。飼養方法は基本的に周年放牧であるが、草量の少ない冬季は乾草の自由採食とし、馬用配合飼料（CP16%）4kg/日/頭を給与している。1986年には、振興院で飼養している済州馬のうち70頭を上限として天然記念物に指定された。しかし、ここでもやはり額の白斑やポニーのような斑毛の馬が多数見られ、様々な外

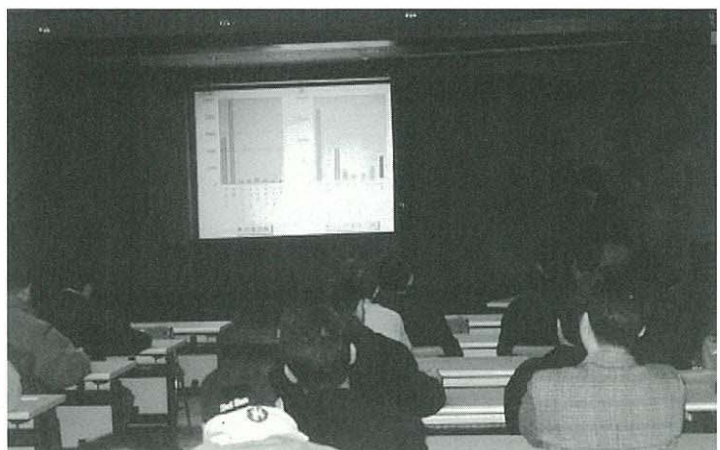


写真2. 済州農業試験場でのセミナー



写真3. 済州島畜産振興院での済州馬放牧風景

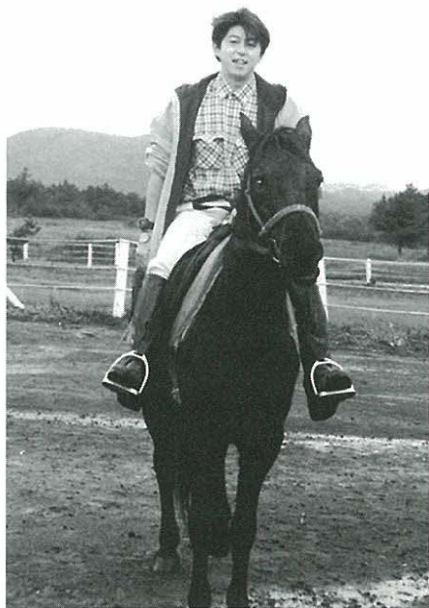


写真4. 済州馬観光牧場にて



写真5. 済州島内の馬肉専門レストラン
看板には「日本熊本」の文字



写真6. 済州馬の肥育牧場

来馬の血が混ざっていることは明らかであった。こうしたなか、純粋な在来馬を保存するため、振興院では2000年からDNA鑑定を行ってマイクロチップを埋め込む登録事業を開始している。現在、純粋な在来馬は20%以下であろうとのことであった。

前述の様に競走馬となる済州馬は5000頭余りのうち約10分の1で、残りの多くは観光牧場などで乗用馬として飼養されている(写真4)。訪問した牧場では100頭の済州馬が年中パドックで飼養され、他の観光牧場も含めて飼料給与量などはほぼ経験にのみ基づく。この牧場では成雌馬1頭に対し、1日に野草乾草4kgと配合飼料2kgが給与されていた。一方で需要はそれほど多くはないが、一部は肉用としても飼養されており、島内に10軒ほどの馬肉専門レストランがある(写真5)。仕上げ体重300kgの馬が約20万円で取引され、年間約500頭の済州馬が屠殺されるとのことで、1軒のレストランで1週間に1頭という計算になる。

「ワシらは自分とこの馬を普段から食っとるから、実際はその何倍も殺してるよ」という生産者の話は公にしてよいのかどうなのか……。また韓国国内よりも日本を馬肉のマーケットとして考え、何度か熊本への視察団を結成しているそうだが、日本国内でも馬肉の肥育方法が公になることは珍しく、実際には難しいであろう。

馬の肥育方法は済州島においても当然農家によって様々で、やはり経験のみによる。乗用として使わなくなった馬を1ヵ月間配合飼料と煮豆と人参で肥育する農家もあれば、育成段階から肥育を始める農家もある。ある肉牛農家では済州馬の肥育も行い、6ヵ月齢以上の育成馬15頭を舍内で群飼し、肉牛用配合飼料(CP17%, TDN70%)40kgと大豆稈70kgを給与していた(写真6)。仕上げ期の3歳馬1頭が別飼いされていたが、なんと配合飼料10kgにイネ科乾草10kg、まさに濃厚飼料も粗飼料も飽食であった。

島内の試験場や大学などで、肥育も含めた馬の飼養に関する研究が開始されるのはそう遠いことではないであろうし、また期待もしたい。

12日目に済州島を発ってソウルに戻り、13日目、金慶男畜産技術研究所長の計らいで当日開催されていた「韓国乳用牛飼養標準作成会議」中に講演させていただいた。韓国全土から集められた錚々たる先生方の前で非常に緊張したが、馬産に対するこの国の興味と期待が思った以上に大きなものであることを再確認した。またこのセミナーにもサラブレッド生産者の方がみえられ、その一人、有名な登山家でもある孫七奎氏の御提案で、これまた急遽予定変更、江原道平昌郡にある孫氏の牧場を訪問する。天安市から3時間、翌日はソウルまで3時間半かけて帰ることとなるが、道中ならびに夜酒を飲みながらのお互い片言英語での会話は非常に楽しいものであった。中でも氏のサラブレッド生産に関する考えは韓国での現状を的確に表し、なるほどと頷ける。無料のKRA種雄馬は能力がほぼ一定であるため、繁殖雌馬の能力こそが重要となる。雌馬購入先として、アメリカ、カナダは距離的に遠く、南半球のニュージーランドやオーストラリアは繁殖季が逆で空胎期間が1年間できる。そこで日本、北海道である。北海道での評価がそれほど高くなくとも、韓国では能力の高い繁殖雌馬として十分通用するとのこと。韓国におけるサラブレッド生産の今後にも、期待大である。

最後に、今回の調査に際して多大な御支援を賜りました帯広畜産大学後援会に対し心より感謝の意を表すとともに、済州農業試験場研究員李種彦氏をはじめとする試験場関係の皆様ならびに済州大学校の皆様には厚くお礼申し上げます。